

平 寛多朗

エジプト人女性作家であるサルワー・バクル (Sawwa Bakr 一九四九-) は、一九七二年、カイロのアイン・シャムス大学経営学部を卒業後、公務員として働き始めた。その一方でバクルは大学に再入学し、そこで文学を学ぶ。その後、批評家・ジャーナリストとして活動を始め、一九八五年には短編小説集『大統領の葬式でのジナート』(Zinat fi Jimazah al-Rais) を刊行し、作家としての経歴を歩み始めた。そしてこれまでに、十を超える短編小説集及び小説を発表している。彼女の作品はエジプト国外でも評価が高く、複数の言語に翻訳され、一九九三年にはドイツで文学賞を受賞している。彼女の作品の大きなテーマの一つとなっているのが、エジプト社会における女性の姿である。彼女が一貫して描くのは、男性優位主義的な考えが残る社会の中で、男性の性の対象となる一方、定職を持たず貧困にあえぎ、時に社会から除外される者としての女性の姿である。実際一九九一年に刊行された『黄金の馬車は空に昇らない』(Al-'Arabah al-Dhahabiyah li Tos'ud li al-Samā')

では、女性刑務所を舞台に、男性による性的虐待や、経済苦から犯罪を起こしてしまった女性達の人生が描かれている。

バクルのテーマは、彼女以前に活躍したエジプト人女性作家と対照をなしていて面白い。例えばエジプト人女性作家の先駆けとなったラティーファ・アルザイヤート (Latifa al-Zayyat 一九二二-一九九六) は、一九六〇年に発表した『開かれた門』(Al-Bab al-Maftih) の中で、家の中で因習に縛られていた女性が、自由を求めて家を離れ社会へ出て行く姿を描いた。これとは反対に、バクルの『黄金の馬車は空に昇らない』では、家を離れ社会に出た女性が、社会の中で因習に縛られ、それに反抗した時、社会から排除され刑務所へと送られてしまうのである。そしてその刑務所の中で、因習に縛られない自由を彼女たちは見つけるのである。自由を求め社会へと出た女性が見つけたのは、女性を閉鎖された空間へと押し戻そうとする社会であった。その事実を、バクルは鮮やかに描き出してくれている。

さて「先祖の髪」は、短編小説集『先祖の髪』(二〇〇三年) の表題作である。主人公の女性は、知的障害の子供を産んだことを理由に離婚され、シングルマザーとして

生きることを余儀なくされてしまう。主人公はそんな自分自身を「老いてたるんだ体の上でできたキノコのような瘤」へ飛ばされた、と表現している。これは、古い考えの残る社会の中で、社会とは隔絶された場所を意味しているのであろう。その場所での主人公は、隣に住む老人との関わりの中に、唯一の心の安らぎを見つけているのである。彼女にとって老人は、人との繋がり、そして生きていることを確かめられる、唯一の「確かなもの」なのだ。しかし「死」は、彼女からその確かなものさえも奪っていかうとする。その「死」の掠奪に対し、彼女は老人の髪を切ることで、彼女の「確かなもの」と繋がり続けようとする。それは、彼女の「死」に対する勝利宣言であり、他者との関わりを絶たれた者の、悲しい恐怖への抵抗なのだ。本作品は知的障害者の母として、社会から疎外された女性の姿を巧みに描いた作品と言える。